

議事録

会議名	令和6年度第1回久留米市子ども・子育て会議 学童・思春期部会
日時	令和6年7月25日（木）18:30
場所	久留米市本庁舎3階 303会議室
出席者	佐藤委員、左村委員、谷口委員、中村委員、日野委員、吉岡委員 6名
欠席者	内田委員、中井委員、山下委員 3名
傍聴者	1名
次第	1 開会 2 委嘱状交付 3 委員紹介 4 久留米市子ども・子育て会議について 5 部会長・副部会長の選出 6 議事 （1）久留米市の子ども・子育ての状況と取組について 7 その他 （1）今後のスケジュールについて （2）こども・若者ワークショップについて 8 閉会
	1 開会 久留米市子ども・子育て会議条例第9条第4項の規定に基づき、会議成立
	2 委嘱状交付
	3 委員紹介
	4 久留米市子ども・子育て会議について <資料2「久留米市子ども・子育て会議について」事務局説明>
	5 部会長・副部会長の選出 部会長に中村委員、副部会長に日野委員を選出
委員	6 議事 （1）久留米市の子ども・子育ての状況と取組について <資料3「久留米市の子ども・子育ての状況と取組について」事務局説明> 質疑なし <意見> 市の子ども・子育てについて、今、どう思っていて、今後どういたらいいか、行政の取組だけでなく、どう取り組んだらいいと思うか、委員の意見を聞く。

委員	教職員、特に子育て世代の先生方が厳しい生活を送っているように感じる。朝 7 時から夜 9 時や 10 時まで働く教員が多い中で、子育て世代の先生は早く帰りづらい。このような職場環境の中、働き方改革が進んでいるにもかかわらず、定時に帰ることが困難である。部活動や家庭訪問、生徒指導、教材研究などの業務があり、すぐに帰れる状況にはない。この問題は教員に限ったことではなく、他の職業の方々にも共通していると思われる。海外の出生率が高い国の労働環境や取り組みを参考にし、我々ができる働き方改革を進めることで、子育てがしやすい環境の実現が必要である。 また、生徒に関する話となるが、子どもは守られているものの、そのための基準が高すぎると感じる局面がある。SSW、家庭子ども相談課、民生委員、児童相談所などの関係者に多く関わっていただいているが、家庭内における環境調整が必要な家庭も多いと考えられる。現時点では教育現場の立場からすぐに効果的な意見は持ち合わせていないが、今のところこのように考えている。
委員	私は久留米市の困窮者の窓口である自立支援センターに勤務している。その視点からお話ししたい。困っている方が多く、個々の問題に限らず世帯全体で複合的な困りごとを抱えていることが非常に多いと感じる。例えば、30 年以上引きこもり、小学校低学年のころから自宅から出ていないため、人と会話することや、文字を書くことも難しい状況にある方もいる。こうした方々と関わるには、かなりの時間を要する。目が合わない、言葉が出ない、言葉を知らないという状態にある。 また、お母さんたちが高齢になってくると、「今後、子どもをどう育てていくか」や「自分たちが亡くなった際に、この子をどうしたらよいか」という不安をよく口にされる。低学年のころから引きこもり、社会の中で再びチャレンジする機会を持てなかったのではないかなと思う。 高校には進学したが、馴染めずひきこもり、結局退学し、家にも居づらく、年齢だけが経ってしまった 20 歳代の方も多い。少しずつ社会に戻って行かれる方もいるが、その筋道がスムーズにいかない、本人たちの思うようにならないところが多いと感じる。 現在、市はホームページや LINE 相談の窓口を利用して困りごとを抱えた方々へのキャッチアップが始まっているが、本当に困った方に届きやすい方法なのかと感じている。一定の効果は上がっていると感じているが、相談に繋がったときに、もっと早くサポートできる機会がなかったのかと考える。自ら SOS を発信できない人や、相談がづらい生活環境や行政には頼らない方もいる。相談窓口を増やすことや周知を徹底するだけでは解決には繋がらないと日々感じている。子どもに対するアプローチとしては、相談は恥ずかしいことではないと伝えたり、居場所を提供したりする取り組みが求められると思う。

委員	世帯全体を早期に相談に繋げる仕組みができればよいと考える。デジタル化が進む今、連携の迅速化が期待できると思われる。小学校から中学校、高校と学校が変わるごとに支援が途切れがちな現実がある。例えば、小学校から中学校に上がる際に、適切な繋がりがないと生徒の学校生活に影響が出る。このような接触ミスを克服するためにも、人の力が必要である。支援する人や関係する人たちが、本人たちに寄り添い、長く支援できるようにスムーズにしっかりと繋いでいくことが大切だと思う。 高校の卒業後も、支援が必要な学生が直面する問題が多い。社会に出る際、少しのつまずきがあると恐れを抱く。つまずいたときに、安心して戻れる仕組みや繋がりが、小さいときから身についているか、そうでないかはとても大きいと思う。今後、私たちが何か仕組みの中で取り組めていけたらと感じている。 私はファミリー・サポート・センター事業を運営する NPO 法人ル・バトーの代表である。このファミリー・サポート・センターは地域のボランティアが子どもを預かる事業である。常々感じていることは、夏休みや年度途中に学童保育所への入所枠が不足しているということである。保育園やこども園で学童への入所予定人数が分かっているはずだが、申請を自主的に行わなければならないため、出し忘れる方もおり、第一子の保護者では知らない方も多い。特に新 1 年生の保護者は、学童の申込書をもらう流れが分からず、困っている状況が増えている。保育園が 3 月 31 日までは預かってくれるが、4 月 1 日からは行き先がないという声が多い。 困っている家庭が急に何でもできるようにはならないため、伴走支援が必要である。また、転入者に対しても、引っ越し後に学童に入れない事例がある。学童ではなくてもいいので、毎日使えるような新たな居場所を地域に設けることも必要ではないかと感じている。 通級教室や療育への送迎をボランティアに依頼するニーズも多い。インクルーシブ教育の観点で、少人数の中で多様な子どもたちが学ぶ環境があれば、子育て世代が久留米に引っ越してくるメリットがある。待機児童がゼロというのは、実際に入りたいところへ受け入れられない現実もあるため、見た目と実際の状況に誤差がある。 学童保育については、高学年までは入れるとされているものの、何校かは入所者が多く、願書をもらえない現実もある。支援員が不足していることも分かっているが、実際の状況との乖離がある。このため、保護者が仕事を辞めたり、転職を余儀なくされるという話も聞く。また、中学生になって通級支援を受けなくなるケースはもったいないと思うし、高校卒業したら、特別支援学校であれば就職がないと 24 時間家にいると聞く。子どもたちは、後々は成人して、就職して、働くということができる社会になってほしいと、いつも感じている。
----	---

委員	私は小学校の PTA をしており、中学 3 年生と 2 年生、小学 6 年生と 4 年生の子どもを育てている。保護者としての目線として、子育て支援の取り組みがあったり、幼稚園の補助金をいただいたり、普通に学校に通わせられていることにも感謝している。これからもこうした取り組みを続けてほしい。 他の保護者からいろいろな問題を聞くことがあるが、解決には至っていない。学年が変わると、先生に情報が伝わらず、同じ問題が繰り返されることにも問題を感じる。学校で起きた問題、あるいは公園で起きた問題においても、教師だけでは解決できないため、他のサポートがあるといいと思う。 友人の子どもが中学校 3 年間学校に行けなかったが、通信高校を経て社会復帰できたのは家庭の対応がよかったおかげと思う。コロナ禍で保護者同士の繋がりが途切れがちなので、保護者同士が集まれる相談の場や行きやすい場所があれば良いと感じている。
委員	現在の話からつなげると、生徒指導に関する事案が発生した際、保護者からのクレームは説明不足が最も多いと考える。現状の説明と今後の対応について丁寧な保護者への説明が不足しており、そこは学校側としても考えないといけないと思っている。 私は子どもたちの現状を踏まえ、以下の 3 点を述べたい。まず、「子どもの健やかな育ちを保障できる社会づくり」で資料 7 ページの成果指標にもあるが、本校でも自分にいいところをなかなか探せていない。自尊感情が低い。どうせ自分は無理などの言葉がよく聞かれる。担任だけでなく、多くの大人からの肯定的な評価が重要である。次に、愛着形成の観点がある。子どもたちは「見てほしい」「構ってほしい」という気持ちを持っており、その愛着が課題であると感じている。 最後にレジリエンスについてだが、子どもたちは非常に高い期待を持たれ、それに耐えられない場合がある。多忙なスケジュールの中で、精神的なプレッシャーから逃げられない状態の子どもも少なくない。先日、夏休みに父子家庭の自宅へ職員が訪問した際、子どもが食事を摂れていない現状を目の当たりにした。クーラーもつけず、何日もお風呂にも入っていない。家庭環境が整っていないという問題も存在し、私たちは保護者の心の安定を図り、共に取り組んでいくスタンスで職員と共通理解している。
委員	大学に所属している立場から、子どもたちに関する問題についてお話しする。医療の中で子どもたちと接する中で、自己表現が困難な子どもが多いと感じている。家庭環境が気になる子どもも多い。この状況を把握するために、家族にどこまで聞いてよいのか悩むことが多い。入院初日からその子の状況を理解することが可能だが、学校の先生がどの程度把握しているのかも気になる。子どもが元気になった後の生活が心配であり、ソーシャルワーカーや相談窓口の活用方法についても考えさせられる。大学生でも自分の意見を口にできないことが多いため、

委員	小学生や中学生はなおさら難しいだろう。小学校であれば、保健室の先生や担任の先生、スクールカウンセラーへの相談など、気軽に安心して話ができるようなところがあるといいと思う。 医療的ケアが必要な子どもについては、小学校入学時に悩むお母様が多く、その受け皿の状況が気になる。他県では、看護師 1 人に対して子ども 1 人の体制が求められることもある。保育園の受け入れが限られているため、需要に対する準備を事前に行う必要があると思う。県外で行われている取り組みなどを参考にし、事前にキャッチして受け皿を整備できればいいと考える。 さらに、ヤングケアラーの問題についても触れたい。多くの学生がさまざまな悩みを抱えており、助けを求められない状況がある。大学の教員がそのことに気がつき、相談先について話し合うことが重要であることを感じる。高校生や中学生も、より多くの相談機会が必要であり、不登校やいじめに繋がるリスクがあるため、心の問題への専門的なサポートが求められる。医療機関やサポートセンターなどとの連携を築き、相談の道筋ができると、皆で連携しながら守っていくことができると思う。 第 2 期久留米子ども笑顔プランの取り組み状況について、これだけの資料を提示いただき、驚いた。現状を把握し、分析し、取り組みが進められていることを知らなかった。即効性はないかもしれないが、今後少しずつ改善に向かっていくのではないかと感じている。 不登校に関しても触れたい。今年の久留米市の不登校対応方針には、過去最高の 700 人が不登校であり、昨年より 188 人増加したことが記載されている。学校によって差はあるが、毎朝、4～50 人ほど靴箱に上靴が入っている状況である。私の学校では、多い方で約 70 人が 8 時半までに登校できていない。休みの子どもは 20 人から 30 人、時には 40 人、50 人に上ることもある。かなりの人数が遅刻したり、昼に登校する。朝、登校していない子どもに対しては、必ず保護者に連絡を入れるが、多くの保護者は朝早くに家を出ており、子どもに「ちゃんと行きなさい」と声をかけている家庭が非常に多いという印象を受けている。 校区によって状況は異なるが、農家が多く、夫婦、おじいちゃん、おばあちゃんがいる家庭が多い校区の子どもたちと、市街地の子どもたちとは、表情や学校での生活、言葉遣い、挨拶、学習状況に違いを感じる。 ここで言いたいのは、大人が笑顔で生活していると、家庭内で子どもたちに笑顔があるといくことを考えると、大人のワーク・ライフ・バランスをもっと進めていく必要があると考える。先ほどもお話があった通り、親からの愛情や愛着は子どもの子育ての根本的な要素であり、非常に重要だと思う。 また、今回の資料を通じて多くのことを学ばせていただいた。
事務局	委員から、意見を預かっている。

	久留米市の子ども子育てについて今思うことと、今後の取り組みについての意見だが、多様性の時代と言われるように、保護者や児童の考え方も行動も、多種多様な状況がある。事業現場からそのような相談を受ける。一方行政は、従来からの平等や公平をベースとした均一的サービス提供を続けておられるのではないか。今の時代に合った新しい平等や後継の視点で、これまでの取り組みを検証し、新しい取り組みの検討を期待する。
	7 その他 (1) 今後のスケジュールについて <資料4「今後のスケジュール（予定）」について事務局説明> 意見なし
	(2) こども・若者ワークショップについて <資料5「こども・若者ワークショップ」について事務局説明> 意見なし
委員 事務局	その他 第2期笑顔プランとは違う形で今後計画を立てるのか。 今回策定しようとするこども計画は、33ページの久留米市貧困対策推進計画や少子化対策、母子保健の取組、など様々な取り組みを包含した形で策定しようと思っている。 第2期久留米子どもの笑顔プランは、このこども計画に包含される形で計画を策定していこうと考えている。
	10 閉会